
夢幻

仲田蓉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻

【Nコード】

N9460W

【作者名】

仲田蓉子

【あらすじ】

ある男子高校生が自分の小学生時代を振り返る話。幼馴染の女子に親友、物語の裏を流れる悲しみの空気が、伝わればいいなあ。ストーリーは空想だったり実話だったり。

山から降りてくる風は、木々を音立てて揺らし、陽光を反射した川の水面を撫で波紋を残し、踝より伸びて若干くすぐったい雑草をざわめかせている。最後に俺の頬を撫で上げたその風は直射する日光に焼けた肌に羽衣を着せるようにふわりと優しく心地よい。

氾濫することを知らない穏やかな下流に沿って並ぶのは、桜や銀杏の木だ。今はどの葉も旺盛に茂っているが、散り際は水面や背後の山、夜になればこれといった灯りがなくてよく見える月やらが相まって、例えようもなく美しい。

そろそろ銀杏が黄色くなってくる季節だ。毎年の落ち葉乃至花びら掃除のめんどくささに想いを馳せながら、俺は銀杏の根元に寝転んだ。

夏休みもいよいよあと数日という季節。この川辺の空き地は俺のお気に入りの場所だ。ここは人通りこそ無いが日当たりが良く、風も気持ちいいし、足元にこそばゆく密集する雑草も異国の草原みただとポジティブに考えれば全く気にならない。俺からすれば、なぜみんなこんなに良い場所に来ないんだろうと不思議な面持ちだ。

なんて言ってみただけど、俺がこの場所を気に入った最大の理由は、空がよく見えるからだ。旭野空あきのそらという、親のギャグとしか思われないう名前をつけられたせいか、お陰か、俺は空が好きだ。刻々と変わる様相をいつまでも見ていようかと本気で思ったこともあるし、天体観測のイベントなんて必ず参加していた。

今日この場所で俺が銀杏の根元に転がっているのは、端的に言って夕日を見るためだった。観察なんて大したものじゃなく、ただぼんやりと夕日が沈んでいくのを眺めたかった。そう、この言葉は実に便利だが、要するになんとなくそういう気分だったのだ。

だが勇み足し過ぎた。時刻はまだ早く、日はまだ没しそうもなく遠くの山の上でぎらぎらと陽光を放ち続けている。他にすることも

ない俺は仕方なく、気長に日没を待つことにした。

それにしても、いつも立っている場所に一度寝転んでみるとなかなか不思議な感じた。景色が全く違って見え、新しい発見ができる。同時に、この世界の雄大さとか、人間の卑小さとかもついでに思い知る。まあそれはいいとして。

俺の頭上斜め上の土手の上に逆さまに見えるのが、幼なじみで同級生の戸矢千晴（ちひろ）の家だ。俺の家はその団地だが、この川辺の存在を教えてくれたのは千晴だ。昔、ここは俺たちの遊び場だった。

「俺たち」の中には、俺と千晴と、あともうひとりいる。一年間だけ一緒だった、これも同級生の、俺たち二人の親友。

なんで今頃六年前のことなんか思い出してんだ。俺は苦笑する。もう過ぎたことだ。何もかも。そう思っても感傷に浸りたくなる、これはエゴだろうか。それでも構わないと思った。どうせ毎年、この時期になると思い返してしまうんだ。

（そういえば、今日があの日だったな……）

六年前の今日、俺一人が例によって日没をここで待っていたとき、二人がやって来て、あいつは言ったんだった。

『話があるんだ、君たちに……』

やけに真面目くさった顔で。

（なんだ、じゃあ俺が今日日没を待ってんのは、なんとなくじゃねえ、あの日をシミュレートしてたのか……）

自分の無意識に振り回されている。俺は再度苦笑する。自分で自分をコントロールできないなんて、まるであの頃と変わらないじゃねえか。

ふと、……

羽音と水音がした。顎を反らせて川の方を見ると、一羽の白鷺が羽ばたいている。たまげている俺をしり目に、奴は悠々と白い翼を広げて西へ飛び立っていく。どこへいくというのだろうか。

いったん思考の内から外へ引つ張り出されると、頭上からわんわんと蝉の声。今まで気にならなかったのが不思議なほどだ。まあ、

木の下に寝転んでんだからこのくらいは我慢しよう。大切な夏の風物詩だしな。

『大切な夏の風物詩だしね』

また頭の中で声が聞こえた。ああ、そうか、これもあいつが言ったことの受け売りか。だがしかしなんだって高校生の俺が十才のガキの言葉をパクらにやなんのだ。なんてな。

この六年の間、あいつのことを忘れたことは一度もなかった、といえば嘘になる。それなりに忙しかった日々の中で、四六時中あいつのことを思い出せるわけもなかった。

だがこの二年間は、忘れるわけにはいかなかった。それを思い出させてくれたのは千晴だった。

(ごめんな、千晴、無理させてよ……)

決して面と向かつては言うことができない言葉を心の内でつぶやく。

今日も空は蒼い。あの日もさわやかな晴天だった。

(晃也……)

俺は澄んだ蒼に向かって、声に出さずにあいつの名を呼んだ。

2013/8/28 (後書き)

一応これがプロローグです。これまた長くなります(汗) お付き合い合
いよろしくお願いします！

これは夢、あるいは幻。

少なくとも現実で起こっていることではない。でなければ六年前の俺を俺が見るなんて、今の技術ではできるわけがない。

俺が今いるこの場所は、どちらかという夢に似ている。俺は時に六年前の俺になり、時に抜け出して完全な第三者からの視点になる。夢の常だ。

しかし俺は前にも同じ鮮明な夢を見た。それはもう、この二年間、何回も。そしてその内容は細部まで、現実には確かにあった出来事だった。そのあたりは、何者かが繰り返し見せる幻のようだ。

夢でも幻でも、俺にそこから抜け出すという選択肢は無い。ただ観客のように、夢幻が終わるのを待つだけだ。それが見飽きることなく、ああまたか、と思えるのは、世間知らずのガキだったころへの羨望、^{せんぼう}今や遠くなってしまった無邪気な心への憧憬、^{しんけい}そして罪悪感だろう。俺はもとよりこの夢幻の世界から抜け出す気はない。ただ始まってしまったものは最後まで見守るべきだと思うだけだ。

舞台は変わらず千晴の家の裏の川のそばの銀杏の樹の下、ただしこれは五年前。小学六年生の俺がすぐそばに立っている。この夢幻の始まり方はいつも同じだ。

「……しまった、まだ五時かあ。早く来すぎた」
オレは独り言を言った。

日没を見るつもりで千晴の家の裏まではるばる一分歩いて来たのに、勇み足だった。まあ積み上げられた夏休みの宿題もやる気になんねえし、ここにいるか。今日はサッカーの練習もねえし。

そう思っ樹の下に横になった。だが寝転んで瞼を閉じた途端、遅まきながら気付いた。うるさい。非常にうるさい。何がって、蝉の声だ。まだ懸命に生き伸びているミンミンゼミやら、早くも秋の

虫コオロギやら、合唱しながら大音量で降ってくる。

「くっそう、うるせえよもう」

蝉に向かつて文句を言っても仕方がないのだが、思わずつぶやく。これではのんびりと寝ることもできない。仕方ない、帰るか。

すぐさま起き上がったオレの耳に、何やら名前を呼ぶ声が聞こえた。

「あ、ほらここにいた！ おーい、空ー」

声の主は振り向く前から分かっていた。

「お、千晴か。なんだ、晃也も」

土手の上から手を振ってこちらに下りてくる二人。

髪を頭のとっぺんで結び、白いTシャツに半ズボンといういつも通りのラフな格好をしているのが幼馴染の戸矢千晴だ。勢いよく坂を駆け下りている。その後ろから慎重に土手を下りてくる大人びた目をした少年が、梁元晃也。オレ達の親友だ。

「どした、二人そろって。昆虫採集でもするのか？」

「うっん、なんで昆虫採集なの？」

「いや、そこは察してください」

「何言ってるんの空？ それより、晃くんがね……」

「ちよっとさ、話があるんだよね。二人に」

晃也が真面目に言うので、オレは首をひねる。千晴もよく状況が分かってなさそうな顔だ。

「何をそんなに改まってんだよ」

「まあ、聞いてよ」

「何の話なの？」

「大事な話」

「まあ、そうだろうな」

雰囲気でわかるわ、そんなことは。

「別に話はいいけど、ここうるさいぜ？ どっか別のところにするか」

「いや、ここでいいよ。僕好きだもん、ここ」

「わたしは別に気になんないよ、蝉の声」

「大切な夏の風物詩だしね」

「そうそう」

「分かった分かった。二人してオレに反対すんなよな」

まったく、こいつらは時々二人だけで結託してしまうから取り残される身としてはあまり嬉しくない。

「ね、とにかく聞いてよ、僕の話」

「ああはいはい、何でも聞いてやるよ」

「そんなに大事な話なの？」

何を思ったか千晴が少し不安げな顔で言う。

晃也はそれに、出会った頃から変わらない、どこか寂しげな笑顔で応えた。

川の水面が光を反射して眩しくきらめいた。

小さなきらめきは他のあらゆる光を吸収して膨れ上がる。膨大な光の中に消えていく晃也、消えていく千晴。川も木も山もすべて吸収され、気付いた時には俺は光に包まれて何も見えなくなっている。

プロローグは終わりか。次に現れるのはきっと、今の場面の二年前、つまり六年前だろう。

始まりを見終わってしまったからには、もう戻ることはできない。

2009/8/28 (後書き)

遅れました、夢幻です(汗だく

ひそかに決めていた月ルールを破ってしまったぜ!!orz ち

よっとさいきん忙しくてあまりPC触れない^q^

ということ次がいつになるか分かりませんあしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9460w/>

夢幻

2011年11月9日14時12分発行